

東京大学総合研究博物館小石川分館

[建築博物教室](#) 第5回

## 窓のアーキテクチャ ——風土と文化のなかで培われてきた窓の多様性

日時：2014年12月14日(日) 13:30-15:00

講師：能作文徳（東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻助教／建築学〈意匠・設計〉）

### 建築博物教室レポート

講義のはじめに、C. アレグザンダー、R. ヴェンチャーリ、H. ルフェーヴルなどの理論が引用され、建築は単に人やものを収容するものではないことが強調された。たとえば、時間をかけて建てることにより生き生きとした質が生まれる、慣習の関係性を利用して新しさにつなげる、空間を主体とした社会関係であるなど、本講義の基本的な考え方が示された。

講義の内容は大きく2つに分けられる。前半は世界の各地の都市の窓のふるまいと窓が織りなす街並についての現地調査に基づく講義であり、後半は講師自身が設計した住宅の理念と工夫の紹介であった。

窓は自然要素のふるまい、人のふるまい、社会のふるまいで決まる。自然要素のふるまいとは光・風・雨・熱など、人のふるまいとは日だまりや風通しのよい場所に佇んだり、窓の開閉を調整したりする行為、社会のふるまいとはその土地の文化や慣習である。窓の設置とその形態は環境、使用者、慣習に左右されるということである。たとえば日本は、湿度の高い風土という自然のふるまいに基づき、縁側や窓の多い開放的な建物が建てられてきた。一方、戦国時代の建物は窓が少なく壁ばかりであったという。こちらには戦乱から身を守ろうとする、人のふるまいが表れている。

街並は通りに面した窓によって決まる。窓にはそれぞれの地域の気候風土や文化慣習が反映されるため、1つの地域には似たような窓が反復される。共通した特徴をもつ窓が通りに反復され連なることで、地域独特の街並が形成される。気候風土や文化慣習に加えて、街並をつくりだす窓には、その土地で受け継がれてきた窓の系譜、法律などの制度、工場や工房による生産体制の3つの要素が関わってくる。この3つの要素が均衡するところに、その地域特有の街並が生まれる。ただし、街並は上記の諸要素だけでは形成されない。そこに住む人びとが、街並をつくりだすために、それぞれの建物に共通性を担保することが必要である。街並は多様な人びとの暮らしの集合であるがゆえそれぞれの建物の差異は自然に生じるが、一定の街並を形成するためには、人びとが建物を建てたり修理したりする際に、共通性を尊重しなければならない。

講義の後半では、「ホールのある住宅」、「Steel House」、「高岡のゲストハウス」が扱われた。いずれも、窓のふるまいや街並をキーワードとしている。「ホールのある住宅」には居住者の生活スタイルに合わせてホールとその周囲の空間が設計されている。ホールはルーバーや連窓により光と風が入るようになっており、自然要素や人のふるまいに基づいた空間だといえる。「Steel House」は緑の前庭の多い街並に合わせて、広いベランダに樹木をつたわせている。街並の共通性を尊重した住宅である。「高岡のゲストハウス」は

伝統的な日本家屋の建替えであるが、既存の建物に内在した記憶や時間を尊重し受け継ぐために、既存の部材が再利用され、庭木を損なわないように設計されている。

今回の建築博物教室には 60 名以上の方が集まった。講義後の質疑応答では、現代の日本の街並に対するさまざまな質問・意見が寄せられた。

(米村 友希／小石川分館学生ヴォランティア)